

阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!

HANKYU TAKARAZUKA SEN
MUSIC EKIDEN MOT!

KAKEHASHI

Foreword

はじめに

大阪梅田駅から宝塚駅まで、そして石橋阪大前駅から箕面駅までを結ぶ阪急宝塚線。その沿線には、複数のホールや大学の施設が点在しています。「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」は、阪急宝塚線の沿線に立地するホールおよび大学の施設が一定期間に共通テーマで連携し、音楽を軸とした場をリレー形式で「駅伝」のようにつなぎ、沿線地域の新しい魅力の創出することを目指すプロジェクトです。

2019 年度はプレイベントとして実施し、2020 年度より本格的にスタートを切る予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、多くのコンサートの開催を断念せざるを得ない状況になり、「MOT!」は休止となりました。私たち、大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻の学生もゼミが解体するかもしれないという事態にまで追い込まれましたが、開催するコンサートにしても中止せざる得なかったコンサートにしても、各ホールの企画者の「想い」が詰まっているはずで、その「想い」や「考え」を取材してマガジンや映像を制作し、音楽が好きな皆様に届けることができるのではないかと考えました。そのような考えのもと、各ホールや大学の施設の「架橋」のようになればという願いを込めて、このマガジンを「KAKEHASHI」というタイトルにしました。

通常は、「制作」の立場の人の想いが表に出ることは少ないですが、各ホールの企画者へのインタビューを「駅伝」のようにつないでいく『KAKEHASHI』を通して、各ホールの魅力、そしてホールで働いている方々の想いが伝わると幸いです。

Message

実行委員長挨拶

2020 年という年は、年が明けた時には予想もしていなかったような大変な年になりました。

2 月ころから始まった新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に世界中に拡がり、現在もその猛威は衰えることを知りません。

その結果、社会におけるほとんどの催し同様、2019 年をプレイヤーとして始まった「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」も全面中止のやむなきに至りました。ただミュージックコミュニケーション専攻の学生の皆さんは、それをただ残念だ、で終わらせることなく、「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」にかかわる関係者の皆さんに積極的に取材を行い、2020 年版「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」マガジンを制作することを企画し、ここにそれが完成しました。

このような年はもう二度と来て欲しくはありませんが、これも 2020 年という忘れ難き年を記憶にとどめる重要な資料の一つになると思います。

ご高覧いただき、ご意見ご感想などお寄せいただければ有り難く存じます。

今後とも、「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」並びにミュージックコミュニケーション専攻をよろしく願い申し上げます。

阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT! 実行委員長
学校法人 大阪音楽大学 理事長

中村孝義

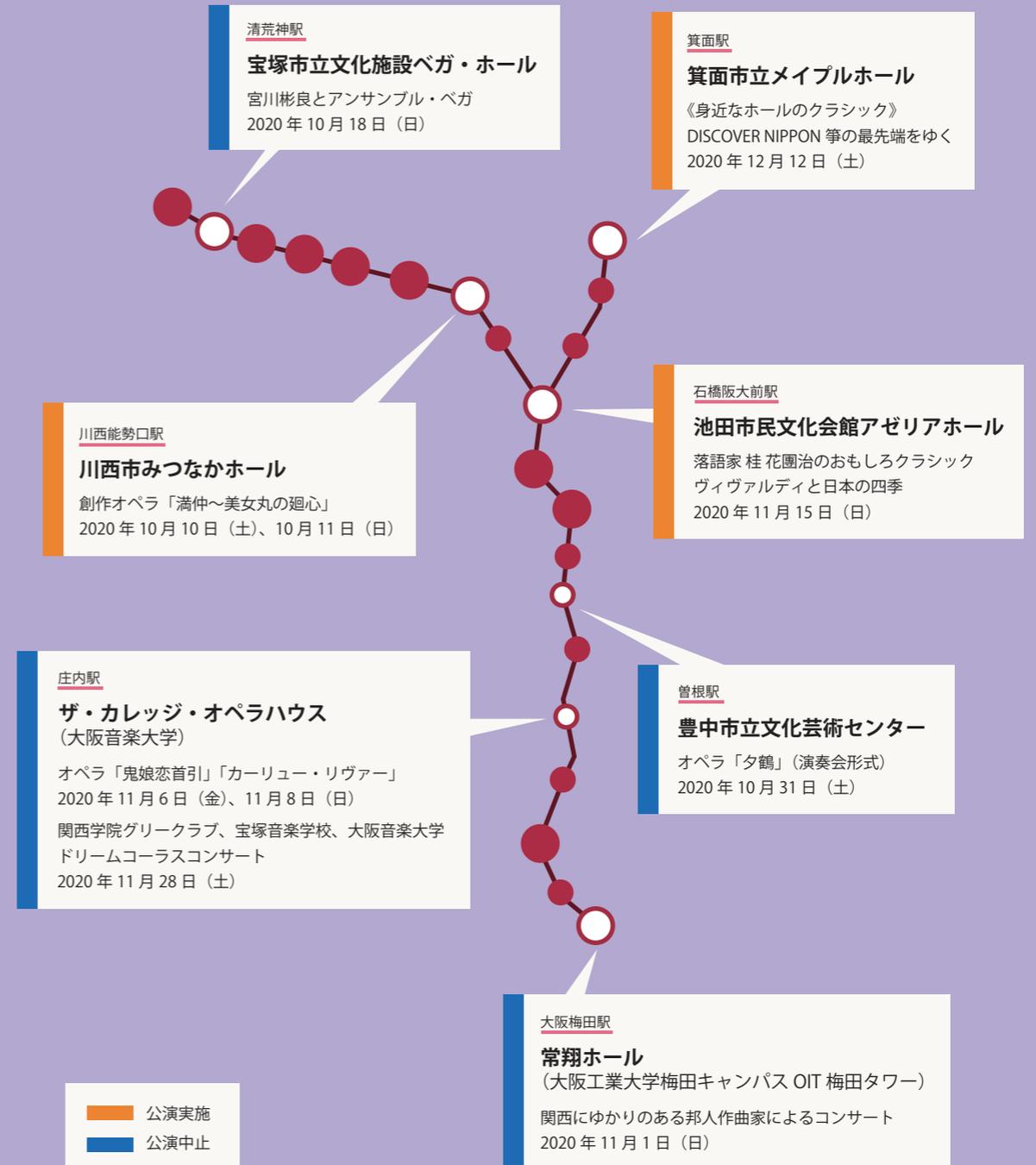
Index

目次

インタビュー駅伝	1
宝塚ベガ・ホール	2
豊中市立文化芸術センター	6
常翔ホール	10
ザ・カレッジ・オペラハウス	14
川西市みつなかホール	18
池田市民文化会館アゼリアホール	22
箕面市立メイプルホール	28
学生座談会	34
おわりに	42

インタビュー駅伝

「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」に参加しているホール担当者の方に、コロナ禍でのホール運営にはどのような苦勞があったのかや、今後の展望などを学生たちがインタビューしました。





Takarazuka Vega Hall

宝塚市立文化施設ベガ・ホール

岡田陽一

(宝塚市文化財団 ベガ・ホール館長)

×

星野頼子

(大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻4年)

公演に込めたメッセージ

星野：今回中止になった公演に込められていたメッセージを教えてくださいませんか？

岡田：中止になってしまいましたが、「宮川彬良とアンサンブル・ベガ」という公演を予定しておりました。この公演は、阪神・淡路大震災を機に、被災者の心の復興を願い生まれてきた特別なものなんです。今年、実はベガ・ホールの開館 40 周年でして、原点回帰と言いますか、室内楽の演奏にふさわしいベガ・ホールとマッチした公演をと考えていたんです。ベガ・ホールから生まれたアンサンブルであるこの公演を開館 40 周年記念事業として企画しておりました。

星野：兵庫県のこの地域にあるベガ・ホールだからこそ、震災からの復興というメッセージを強く感じますね。《すみれの花咲く頃》を演奏する予定だったとお伺いしていたのですが、どのようなプログラムを考えておられたのですか？

岡田：《すみれの花咲く頃》をアンサンブル・ベガ・ヴァージョンにしたものがありまして、その楽曲を《すみれの花咲く部屋》と名付けています（笑）アンサンブル・ベガのコンサートでは、毎回オープニングでその楽曲を演奏しています。

星野：室内楽だから《すみれの花咲く部屋》、面白いタイトルですね（笑）



アンサンブル・ベガの公演は定期的開催されていますが、今回予定していた公演の企画内容で何か通常と違う部分があれば是非教えてください。

岡田：クラシックとポップスのように、違ったジャンルの音楽を一度に楽しめる公演を予定していました。それを通して、室内楽本来の楽しさみたいな部分を伝えたいという意図がありました。特に今回の企画は、できるだけ若い人に来ていただきたいという思いもありまして、開館 40 周年にちなんで、高校生以下の方 40 人を招待してはどうだろうか……みたいなことを考えたり、リハーサルを少しだけ公開したりして、若い方に少しでも興味を持っていただけたらいいなと考えていました。

星野：招待や、リハーサル公開なんてとても貴重な機会ですし、とても面白くて素敵ですね！このホールを利用されるお客様は若い方と年配の方どちらが多いのでしょうか？

岡田：そうですね。年配の方が多いですね。クラシック音楽を演奏している若い方はたくさんいると思うのですが、他の人の演奏を聴く機会は少ないように感じます。





若い演奏家の中には自分たちの練習でいっぱいいっぱいな方もおられると思うので、仕方ない部分もあるかとは思いますがね。

星野：それこそ、プロの演奏家の方々によるリハーサル公演は、音楽を学んでいる学生たちには絶好の機会になりますもんね！

岡田：そうなんです！プロの演奏家のリハーサルってやっぱりすごいですよ！意見を戦わせながら一つの公演を作り上げていく工程を見ることができるいい機会ですし、なかなか見られるものではないと思うのでぜひ機会があれば見ていただけたらいいなと思いますね。



コロナ禍での音楽活動について

星野：新型コロナウイルス感染症対策をしながら状態を立て直すために試行錯誤されたと思うのですが、具体的にどのような取り組みをされているのですか？

岡田：新型コロナウイルス感染症の流行前と後ではガラッと状況が変わってしまいました。それに、今まで経験したことのない事態ですから、本当に手探りでやっています。消毒液を置いて、椅子の間隔を開けて、キャパシティの半数の客席数で公演を開催しています。

今回の公演の中止が決まった後に、アンサンブル・ベガとベガ・ホールとで、何か出来ないかという話になり、規模を縮小するという形で、無料のコンサートを2回公演で開催しました。演奏者はボランティアです。このコンサートに関わる出演者、スタッフ全員が抗体検査を受けた上で開催し、久しぶりの生演奏を楽しんでいただきました。

星野：中止になってしまっても、音楽を通して「何かしたい」という気持ちは感動的で

すね。ボランティアの精神で音楽を止めることなく響かせ続ける情熱を感じます。

来年度への意気込み

星野：私たち学生も、この「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」で今年できることとして冊子の作成を決めたのですが、来年は開催できることを願っています。ベガ・ホールさんの来年度の企画について何か予定していることがあれば聞かせてください。

岡田：来年度の事業計画について決めているところなのですが、この「宮川彬良とアンサンブル・ベガ」を来年こそ開催できたらいいなと思って計画しております。

星野：ありがとうございます。楽しみにしております。来年もよろしく願いいたします。

(2020年10月20日インタビュー)

〔中止となった公演〕

宮川彬良とアンサンブル・ベガ

阪神・淡路大震災からの心の復興を目指してベガ・ホールで結成されたアンサンブルによるコンサート。
世界に知られる日本の漫画家・手塚治虫の『ブラック・ジャック』を基にした室内楽組曲や、宮川彬良の編曲による宝塚歌劇団を象徴する楽曲《すみれの花咲く部屋》を演奏予定であった。

2020年10月18日(日)

出演：宮川彬良
アンサンブル・ベガ（辻井淳 Vn、日比浩一 Vn、馬淵昌子 Va、近藤浩志 Vc、新真二 Cb、鈴木豊人 Cl、星野則雄 Fg、池田重一 Hr）



© T.Tairadate

宝塚市立文化施設ベガ・ホール

兵庫県宝塚市清荒神1丁目2番18号
アクセス：阪急宝塚線「清荒神」駅すぐ

<https://takarazuka-c.jp/vegahall/>



© 植村耕司



Toyonaka Performing Arts Center
豊中市立文化芸術センター

朝倉祥子
 (豊中市立文化芸術センター総合館長)

×

吉川さくら
 (大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻4年)



**ホールが協力して
 活気ある豊中に**

吉川：「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」は昨年からはじめましたが、実行委員会が発足した際どのようなお気持ちでしたか？

朝倉：阪急宝塚線の沿線にいくつかのホールがあることはもちろん知っていますし、行ったことがあるホールばかりですが、それらのホールを豊中市立文化芸術センターとあまり関連付けて考えたことはありませんでした。お話をいただいてから、ホールが点在しているということを改めて意識しました。ホール同士がお互いを知るということは私たちにとってもすごく大切なことですし、協力してお客様にも知っていただいて、阪急宝塚線の沿線の文化を活性化していくことは本当に素晴らしいことだなと思いました。ですから大賛成で、とても嬉しく思いました。

吉川：昨年を振り返って印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

朝倉：昨年の豊中市立文化芸術センターのイベントでは、大阪音楽大学の学生さんが企画した「阪急電車の行く道」*です。素晴らしい公演をしていただきました。

ジャズを普段このホールで扱うことはあまりないですし、多目的室で本格的なコンサートをやることは滅多にないので、楽しく聴かせていただきました。それがとても印象に残っています。

**オペラ《夕鶴》を選んだ
 3つの理由**

吉川：今年の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」のテーマは「日本人と自然」でしたが、オペラ《夕鶴》を選ばれた理由を教えてください。

朝倉：豊中市立文化芸術センター大ホールは、壁面や反響板に大阪産の杉材が使われています。そういった日本の自然を感じさせるこのホールに、「日本もの」が合うなど常々思っていました。またオープンして3年半、オペラをやったことがなかったので、オペラをやりたいと思っていたところに「日本人と自然」というテーマになりましたので、《夕鶴》がまさにぴったりだなと思いました。日本センチュリー交響楽団が豊中市立文化芸術センターの指定管理者に入っており、加えて「音楽あふれる街の推進に関する協定」も豊中市と締結していますので、日本セ

ンチュリー交響楽団というオーケストラをアピールしていきたいという思いもあり、演奏会形式で行う予定でした。

吉川：オペラの作品を演奏会形式で行うにあたり、照明などの演出はどのようにされる予定でしたか？

朝倉：出演者が少なく、歌手4人と数人の子供たちの合唱のできるオペラなので、オーケストラも歌手もステージにのる形を考えていました。舞台装置までは難しかったですが、多少の小道具や照明などで動きや演出をつけてセミステージに近い形でやれたらと考えていました。

吉川：出演者選出の理由を教えてください。

朝倉：歌手は《夕鶴》の経験がある方を選ばせていただきました。指揮者の現田茂夫さんも《夕鶴》を知り尽くした方だったので、素晴らしいものができるだろうと楽しみにしていました。また4人の歌手の方のうち、晴雅彦さん、石橋栄実さん、松森治さんは大阪音楽大学出身で、子供たちは豊中青少年少女合唱団で、豊中でやるにはふさわしいキャストが揃ったと思っていたのですが……。



オペラ《夕鶴》の魅力は オペラ初心者でも楽しめること

吉川：オペラ《夕鶴》の魅力をお聞かせください。

朝倉：曲が素晴らしいと思います。團伊玖磨さんの音楽が心に響きます。私はオーケストラのオーボエ奏者だったのですが、何

回も《夕鶴》を演奏したことがあります。何度演奏しても、心にしみる名作だと思います。しかし現代とはかけ離れた作品ですので、今の若い人たちや外国の方がこれを鑑賞したらどう思うのかと興味を持ちました。オペラとはこういうものなんだと知っていただく作品として、初めてでも長すぎず聴きやすい、分かりやすい作品だなと思っているので、多くの方に観ていただきたかったです。

満員のホールで 開催できることを目指して

吉川：オペラ《夕鶴》を中止にされた経緯をお聞かせください。

朝倉：練習がまだ始まっていない4月に中止を決めました。やはり10月となるとどうなっているか全く想像がつかなかったので、無理をしてやるのも良くないと思いました。またお客様もホールに足を運んでくださらない状況だと思ったので……。オペラは演出関係やオーケストラに大きな予算が必要になります。たとえ演奏会形式でも照明や演出に経費がかかるので、大きな予算でやるからにはたくさんのお客様に見ていただける状況で開催したいと考えました。

9月19日には、久しぶりに日本センチュリー交響楽団のオーケストラ公演が行われました。かなりたくさんの方に来ていただき賑わいました。600人ほどだったと思います。オーケストラもソーシャルディスタンスを意識した公演になりましたが、多少間隔を開けた程度で、普段に近い配置で行いました。しかしいつまた第3波がくるかわからないので今後も油断しないでいきたいですね。

吉川：新型コロナウイルス感染症が流行し始めて、豊中市立文化芸術センターにはどのような変化がありましたか？

朝倉：閉館していた時期は、もちろん全公演中止・延期になりましたが、再開してから

も中止が相次いでいる状況です。9月も数えるほどの公演しか行えていません。10月までは客席50%で販売してしまっているものはそのまま、11月からは客席100%でチケットを販売する予定です。その後どうするかは未定です。新型コロナウイルス感染症が流行し始めてから動画配信サイトを使って、配信コンサートも行うようになりました。生のコンサートもやりつつ両方でいろんなことができたらいいなと思っています。

MOT! がホールの魅力を 再発見するきっかけに

吉川：来年の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」のテーマとして「今伝えたい音楽、音楽のこれまでとこれから」が予定されていますが、来年に向けての思いをお聞かせください。

朝倉：ホールの存在を多くの方に知ってもらうということを大事にしたいです。「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」によ

て様々な地域の方にご来場いただいて、楽しんでもらえることを願っています。ホール同士がお互いを見ることによってお互いに、特徴や魅力を再発見できると思います。豊中のホールはこういうところがいいところで、こういうところをアピールして、こういうところを磨いていけばいいんじゃないかとか……。お互いが刺激しあって地域文化を高め、皆様に地域の魅力を知っていただけるよう活動したいと思っています。



*2019年12月4日(水)豊中市立文化芸術センター多目的室で行われた。阪急宝塚線各駅や沿線各所にちなんだ楽曲で宝塚線を通ったイベント。企画はミュージックコミュニケーション専攻2年生が担当した。

(2020年9月24日インタビュー)

〔中止となった公演〕

オペラ「夕鶴」(演奏会形式)

1952年に大阪で初演された、日本を代表する作曲家・團伊玖磨作曲のオペラ《夕鶴》を演奏会形式で上演予定であった。

2020年10月31日(日)

指揮：現田茂夫

演出：青木一雄

オーケストラ：日本センチュリー交響楽団

出演：石橋栄実、中井亮一、晴雅彦、松森治、豊中青少年少女合唱団

曲目：オペラ《夕鶴》



豊中市立文化芸術センター

大阪府豊中市曾根東町3丁目7番2号

アクセス：阪急宝塚線「曾根」駅から徒歩約5分

<http://www.toyonaka-hall.jp/>





Josho-Hall

常翔ホール

禅定佳隆

(常翔学園 OIT 梅田タワー 常翔ホール館長 / 常翔学園中学校・高等学校 芸術科音楽教諭)

×

星野頼子

(大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻4年)



今年企画していた MOT! 公演について

星野：新型コロナウイルス感染症の影響で、今回中止になってしまった常翔ホールの公演について教えてください。

禅定：本年度の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」は、日本をテーマにした作品で企画しようとしたことだったので、邦人の作曲家による歌曲を組み込んだ公演を予定していました。歌手の方にも依頼をかけて、関西にゆかりのある邦人作曲家にスポットライトを当てた演奏会を企画していたんですけれども、開催できなくなり非常に残念に思っています。

星野：公演が開催できるかどうか分からない状況になった時に、企画者として、また演奏家としてどのようなお気持ちでしたか？

禅定：企画者や館長という立場だけではなく、演奏する側の立場で考えると、その時の状況によって、出来るか出来ないか分からないコンサートへの準備というのは、コントロールが難しいですね。「やるんだったらやる！やらないなら次年度に備える！」と、迅速に決断するのが演奏者の方々に対しても一番いいと思うので、今回は早い段階で公演中止を決断して、気持ちを切り替えました。

星野：お客様目線を考えるのと同じくらい、演奏者の方の気持ちを考えておられるんで

すね。禅定先生だからこそ分かるそのお気持ちはとても勉強になります！

禅定：両方の目線で考えることが大事ですよね。お客様にどの様なものを提供できるかがもちろん第一優先課題です！「この演奏会面白かったな！明日から頑張れそう！」という気持ちになっていただくには、やっぱり企画力も大事だと思いますし、目的や方向性がはっきりとした企画だと奏者の意欲も湧いてくるので、あいまっていいものができあがるんだと思います。

ミュージックコミュニケーション専攻の学生の皆さんが考えられた今回の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」という企画も非常に素晴らしいと思いました。プレスリリースでの記者会見も大変明瞭で方向性もよく理解できました。パンフレットのデザインなんかも含めて、トータルで見ているシリーズだなと思いました！せっかくいい企画を考えたのに、今回の新型コロナウイルス感染症の影響で大半が中止になってしまったのは本当にもったいない！もったいないですよね？なんとか次の年につなげていかないとね！

星野：途切れてしまうのはもったいないですよね。昨年のイベントで、「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」を通して各ホールのつながりはできたと思いますが、公演自体が定着しているか分からないので不安な気持ちもあります。禅定先



生がおっしゃられたように、今後もつなげていくことはとても大切なと思います！今年は今年出来ることとして、この冊子を作成して、来年の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」につなげていけたらいいなと思います。

私、実は去年の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」と同時開催していた常翔ホールロビーコンサート見にいってたんです！その時、お客様も数多くて、見た感じ年齢層も幅広くとても衝撃を受けました。常翔ホールのコンサートはどのようにしてはじめての一步を踏み出して、そのあと定着化させていったのか気になります！

禪定：私も、あんなにたくさんのお客様が来られるとは思ってもなかったからびっくりしましたし、とても嬉しかったですよ！やっぱりちゃんといいのを披露しないと、お客様が続けて来てくださることはありませんから、私たちの学園と連携協定を結んでいる大阪音楽大学がいいものを提供して下さってるお陰だと思ってます。

私は司会進行をしたり、周年記念コンサートではピアノを演奏したりするのですが、絶対に「本日、演奏しましたこの若い演奏家を応援してあげてください！また、このホールの上の階にある大阪工業大学があって、若いエンジニアも育っています。合わせて応援をお願いします！」って言い添えることにしてるんです。音

楽を楽しんでいただきながら、演奏家を応援してもらえたらいいな、この学校についても認知してもらえたらいいなと思ってます。

星野：ありがとうございます。私たちもそんなふうに定着化させていけたらいいなと思います。

来年の MOT! 公演への意気込み

星野：来年も同じように阪急宝塚線のホールさんとのつながりも保ったまま、この「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」という企画を続けて盛り上げていきたいって思うんですが、常翔ホールさんの意気込みやお気持ちを教えてください。

禪定：常翔ホールのコンサートにしても、この「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」の企画にしても、「続けていく、つなげていく」というのが大切。「コミュニケーション」はその手段の一つでもあるけど、その目的として「ネットワーク」をどんどん広げていくっていうところが重要ですから、ミュージックコミュニケーション専攻の学生の皆さんにもそこを頑張りたいと思いますね。我々もこの企画に名を連ねるっていうことに意義があると思ってるので、常翔ホールとして次は何ができるかなと考えながら来年も参加したいと思っています。今はまだ頭の中での企画ですが、せっかく大阪の中心、梅田にあるホールですので、やはり



関西で活躍された方にスポットを当てた企画を考えたいと思っています。是非来年は成功させましょう！よろしくお願いします！

星野：ありがとうございます！こちらこそ来年もよろしくお願いします！

学生たちへのメッセージ

星野：最後に、演奏家として、常翔ホールの館長として、演奏会の企画者として、禪定先生から学生たちにメッセージをお願いします。

禪定：私たちが大阪音楽大学に在籍していた頃は、クラシック音楽や邦楽を中心として「演奏する人」「作曲する人」「音楽の理論や音楽学を学ぶ人」などに分かれていました。そして、いずれの分野においても必ず「演奏するためのレッスン」がありました。加えて今は、星野さんの様に「地域と結びつきながら企画や運営をする人」や「音楽でビジネスをする人」、これらを学べる場があると聞いており、これから新しい学びを通じて、卒業された皆さんがどんどん社会貢献をされるだろうと、大変楽しみにしているところです。

私自身、最近になって「音楽を学んできた人」のメリットとは何なのか？と考えることがあるのですが、その答えは音楽の持つ他の芸術とは少し違った特性にあると思います。演奏する場合、私たちの世界では「消しゴム」がありませんから、その場その場で思い描いた心情や情景を「音」に託すこととなります。たとえミスがあったとしても、決して後戻りはできません。社会に出ると振り返りや見直しが要求される機会は多くありますが、音楽人だからこそ「現場での対応力」や、失敗があってもまずは「前を向く力」が備わっていると思います。これこそ「Live (ライブ!）」ですよ。どうぞその長所を生かして学生の皆さんには、こんなコロナ禍の社会だからこそ、前を向いて胸を張って音楽人として学び、社会を歩んでいただきたいと思いますね。

星野：素敵なメッセージありがとうございます。「前向きに、臨機応変に、物事を考える」ってことは何事においても大切ですよ。本日はありがとうございました。

禪定：こちらこそありがとうございました。

(2020年9月25日インタビュー)

〔中止となった公演〕

関西にゆかりのある邦人作曲家によるコンサート

山田耕筰、貴志康一、猪本隆の作品を取り上げ、奈良県で吉野杉(川上村産)を用いて製作されたヴァイオリンの演奏を予定していた。

2020年11月1日(日)

出演：岡坊久美子(ソプラノ)、畑儀文(テノール)、堀江恵太(ヴァイオリン)、禪定佳隆(ピアノ)ほか



常翔ホール

大阪府大阪市北区茶屋町1番45号
アクセス：阪急電鉄「大阪梅田」駅から徒歩3分



<http://www.oit.ac.jp/institution/>



The College Opera House

ザ・カレッジ・オペラハウス

中村孝義

(学校法人大阪音楽大学理事長)

×

梶本大雅

(大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻4年)

ミュージックコミュニケーション専攻と MOT! のつながり

梶本：2020年は休止になってしまいましたが、「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」についての中村理事長の考えを改めてお聞かせいただけないでしょうか。

中村：ミュージックコミュニケーション専攻の総仕上げとして、「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」を実現した理由は、机の上での勉強だけをして卒業したというのではなく、社会と直に接触をして実のある経験を経験することが、最高の学びになるだろうという考えがあったからです。演奏家でもそうですが、いくらレッスン室でいい演奏をしても舞台上に立っていい演奏ができなきゃまず意味がない。家の中だけでいい演奏していても仕方がないと思います。

梶本：そうですね。確かに今まで私たちの専攻は自分たちが主体となって、企画から実施までしていたのですが、昨年度、実行委員会が授業内で行われ、会議に同席するなど、これまでと異なる社会との関わりを体験でき、とても貴重な時間だと感じました。

中村：世間から注目していただき、「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」が新聞で大きくとりあげられ、NHKでは「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」に取り組むミュージックコミュニケーション専攻の様子が放送されました。昨年はプレイヤーで、今年から本イベントの予定でした。去年の経験を礎にして、今年からどういふことをやっていけるのか期待していたので残念極まりないです。



梶本：ありがとうございます。そんな中で今回のこのマガジンの制作についてはどのように思われましたか？

中村：僕は梶本くんたちがこの1年をただ単に「残念だった。やりません」じゃなくて、「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」の休止にどのように対応するか考えてくれたのは、すごくいいことだと思います。だから、梶本くんたちが「このような提案をしてくれています」と聞いた時に、素晴らしいと思いました。

そういった意味で梶本くんたちの場合は全く違った経験を2つできているわけだから、これはこれとしてすごく大きな経験ができたのではないかと思います。平常時のことも知っているし、こういった危機的な状況の時も知ってる。どんな状況においても何か工夫してやっていけるという力が出てきているわけだから決して悪くないと思うんです。

大阪音楽大学が公演で 創りたかったもの

梶本：僕は昨年「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」に関わらせていただきました。特に印象に残っているのはドリームコーラスコンサートです。この4年間の中で一番いい経験をした舞台でした。ミュージックコミュニケーション専攻は、今まで学内の公演に関わる機会がなかったので、声楽専攻、管弦打専攻の方はもちろん、関西学院グリークラブ、宝塚音楽学校本科生と共にコンサートを創り上げたことは個人としてもすごく印



阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT! 実行委員会 会議の様子



象に残っていたため、今年も楽しみにしていたのですごく残念です。

ドリームコーラスコンサートはずっと舞台裏にいたので、出演が終わって舞台裏にはけてくる時の表情をすごく近くで見ることができたのですが、本当にみんな笑顔だったことを今でも鮮明に覚えています。それを見た時に「舞台裏で仕事をする、制作をしていく楽しさ」を改めて感じました。

今年の公演予定だった演目ではオペラがとて楽しみでした。小学生の時から歴史がすごく好きで伝統文化にも興味を持っていたので、今回のオペラ公演は、原作が狂言や能にある作品なので、そういう和と洋が混じったオペラがあるんだというのを知ったことで改めて文化が混ざるって面白いなというのをすごく感じていました。

ドリームコーラスコンサートと、今年のオペラに対してどのような思いを持ってらっしゃいますか？

中村：ドリームコーラスコンサートやオペラが開催中止になったことは非常に残念です。今年、制作予定だったオペラ《鬼娘恋首引》《カーリュウ・リヴァー》ってのはちょっと難しいオペラですが、非常に面白い作品です。難しいオペラだけに、今回の状況下では練習するための環境やスケジュールを合わすことが厳し

いと判断しました。いい加減な形で乗せてきたってきっと誰も感動しないです。やっぱり精魂込めて創り上げることで初めて伝わるものがあると思います。だからこの状況下ではなかなか難しいと考えました。新型コロナウイルス感染症に対応するために今までなかったような出費をどんどんしなければならぬ。そのため2020年度の事業全体の見直しもせねばなりません。本学では他に比べて随分切りつめた費用でオペラを制作していますが、それでも厳しい状況です。そういった二重の意味で今年断念せざるをえませんでした。

梶本：なるほど……難しいオペラであっただけに、厳しかった部分。また、僕たち学生が知らない部分での大学として必要な出費もあったことが驚きです。

中村：ドリームコーラスコンサートは昨年、初めて外部の人たちを我々のところに呼んで、実現したコンサート。本当に素晴らしいコンサートだったので実現にご尽力いただいた宝塚音楽学校の校長で、阪急電鉄の会長でもあられる角和夫さんに「またいつか再びできたらいいですね」と申し上げていたのです。その後、宝塚音楽学校に角さんが行かれた時、会場に観に来ていた予科生の人たちが、自分たちも来年するものだと思っていたと知って、それにあと押しされたかたちで、

「来年もやりましょう」と言ってくださったんです。その来年って2020年、今年ですよ。それでやるだけでなく、日程も決めていました。関西学院の方ももちろんやりたいと。

梶本：関わった人全員が満足して、次も！って言うてくださる公演に関われてたと思うと本当に嬉しいです、僕たちスタッフにとっても貴重な経験だったと改めて感じます。

中村：要するに、いろんな関わってくれたみんなが喜んでくださった。本学の学生たちも宝塚音楽学校の人たちはどういうふうに勉強しているとか、礼儀の正しさも学べるし。聞いたら当日指揮をふられた本山秀毅先生が指摘した時にうちの学生と宝塚音楽学校の反応が全然違ったと言われて笑ってしまったんだけど、学生たちにとっても非常にいい経験になったと思います。その裏方の中にミュージックコミュニケーション専攻の学生が参加してくれたということも、よかった。お客さんもほぼ満員でしたしね。そういうよ

うなことが今年もまたできると思っていたので本当に残念です。

3校で開催するということに意味があったので、2つの公演とも学生の皆さんにとっても後ろから支えたり関わったりするチャンスを失ったわけだから残念なことだろうし。私たちにとっても大阪音楽大学がこんなことをやっていますといったことを知ってもらい、元々重要なオペラとそういうドリームコーラスコンサートがなくなったことによって大きな喪失感があります。これを来年の可能性として残して、昨年に経験したことはみんな記憶として残っているのは是非来年はできたらと思っています。

梶本：ぜひ来年こそ公演を観ることができたらと思います。また、専攻として関わることが楽しみです。本日はありがとうございました。

中村：是非、観にきてくださいね。こちらこそありがとうございました。

(2020年8月31日インタビュー)

〔中止となった公演〕

オペラ 「鬼娘恋首引」「カーリュウ・リヴァー」

狂言『首引』を基にした鈴木英明作曲のオペラ《鬼娘恋首引》、能『隅田川』を基にしたといわれるブリテン作曲のオペラ《カーリュウ・リヴァー》の上演を予定していた。

2020年11月6日(金)、11月8日(日)

指揮：牧村邦彦

演出：井原広樹

オーケストラ：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団

出演：「鬼娘恋首引」内藤里美、橋本恵史、田中勉 ほか
「カーリュウ・リヴァー」藤田卓也、榎貴志 ほか

関西学院グリークラブ、宝塚音楽学校、大阪音楽大学 ドリームコーラスコンサート

阪急沿線にある名門2校を迎えて、合唱をメインとするコンサート。公演内容については学生による企画チームにて決定し、制作過程もSNSなどを通じて発信予定であった。

2020年11月28日(土)

出演：関西学院グリークラブ、宝塚音楽学校本科生
大阪音楽大学合唱団

ザ・カレッジ・オペラハウス

大阪府豊中市庄内西町1丁目5番38号

アクセス：阪急宝塚線「庄内」駅 西口から徒歩約10分

<https://www.daion.ac.jp/campus/opera/>





Kawanishi Mitsunaka Hall

川西市みつなかホール

岡本健一

(川西市文化・スポーツ振興財団常務理事)

×

菅彩乃

(大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻4年)

MOT! 休止のなか 開催した想い

菅:「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」が新型コロナウイルス感染症のため休止でしたが、「みつなかオペラ」を開催された想いをお聞かせください。

岡本:今回開催した「みつなかオペラ」《満仲～美女丸の廻心》は大阪音楽大学の名誉教授だった景山伸夫先生が作曲されました。指揮者である牧村邦彦先生と景山先生の葬儀参列の際に、追悼の意味でも再演したいと語り合い決意をしました。また、初演から20年ぶりに再演ということでかなり思い入れがありました。ただ、前回の公演である「満仲～美女丸の廻心」ではトラブルがあったため、きちんと話し合いを重ね「みつなかオペラ」で活躍している人が関わることで制作を進めました。能楽師の先生をお迎えして、殺陣、振り付けをし、映像を使用しました。悲しい部分もあるけどもダイナミックに魅せようとしたのが、結構大変だった点です。

菅:実際に公演を観させていただきましたが、舞台だけでなくスクリーンに映像を流すなど本当に演出が独特でした。やはり大変だったのは演出だったのでしょうか？

岡本:難しかったのは曲ですね。作曲者が亡くなっているので、指揮者を中心に継ぎ足したり、アルペジオにしたりするなどの編曲が行われました。実際に指揮者と演奏者で合わせていく中で、差異が生まれるなどドタバタしました。新しく進行をやり直しまではいかないものの、継ぎ足しなどの変更点が多く、徐々に一つの大きな曲に完成していきました。

菅:なるほど、単に再演するのではなく補筆もおこなったんですね。



大人数で集まれない状況下での 対応と流れ

菅:次に、オペラを制作していく過程についてお聞きしたいです。関わる人数が多い中、どのような方法でコミュニケーションを取っていたのでしょうか？

岡本:キャストとの連絡は、制作マネージャーである丹治亜弥子が一通り管理しました。制作の補助に1人いるため、基本的には2人で計画を連絡しています。主に使用していた媒体は Messenger です。

菅:2人だけでかなりの量のスケジュール管理をされていたんですね。新型コロナウイルス感染症が拡大して、緊急事態宣言のなかでの稽古はオンラインでの開催になっていたのでしょうか？

岡本:オンラインではなく、舞台上でほぼ行いました。新型コロナウイルス感染症の影響で、ステージの空きが多かったため、基本的に舞台でできたことが例年と違いましたね。普段は、音楽稽古に関してはレッスン室ですが、空いた時間に舞台上で練習になります。かなり隙間を縫っての練習です。

菅:今回、制作はどれくらいの期間で行われたのでしょうか？

岡本:4月から音楽稽古を始めて、8月に音楽の通し、演出を行っていました。特に今



年は密にならないように、練習期間中に感染対策にも配慮しました。リハーサルの時でも、日本の舞台であったため、土足厳禁で草履を準備しました。アルコール消毒やマスク着用などスタッフから出演者までかなり気をつかいました。みつなかホール自体は、20分で空気が換気されるようになっていて、オーケストラピットや舞台上にも空気循環のためにサーキュレーターを導入するなど徹底していました。

菅：やはりこの状況下で開催するために様々な工夫されていたのですね。早く治まることを願うばかりです。次に今回の演目のオペラについて、お聞きしたいです。今回の演目は川西市に沿ったオペラでしたが、それが制作された経緯を教えてください。

岡本：私は一番最初から携わってないものの、「ご当地オペラ」という形で「川西市民オペラ」を制作したと聞いています。作曲をされた景山先生が川西在住であり、



源氏の発祥などを元に制作をしていったと聞いています。「みつなかオペラ」自体は、最初は違うホールで開催していましたが、5回目からみつなかホールで開始し、現在まで続いています。

来年に向けて叶えたい夢

菅：今でこそ「ご当地」という言葉が流行するぐらい、地域に根強いものが注目されつつありますが、それがオペラという形で作品に残り、地域に実際にあるお寺の名前が出てきたことが印象的でした。だからこそ親しみを持っていただいているのかもしれないですね。また、次回30回目を迎える「みつなかオペラ」ですが、こうしていきたいなどの夢があればお聞きしたいです。

岡本：オペラ推進をしている中で、私が携わった「あましんアルカイックホール」建設・設計の時に、オペラを日常的にしたいという目標がありました。学生時代に吹奏楽（ホルン）をやっていたきっかけで、大阪音楽大学で指揮を教えた辻井清幸先生と15歳の頃からの知り合いです。観客があまり知らないような曲の研究をお互い行っていました。絶対にオペラができるホールを創ることで、もっと市民

に親しみを持ってほしいと思っています。オペラの歌声はひとつひとつ違って素晴らしいものです。川西のオペラは3年を周期としてテーマを変えています。その中の公演も1つはメジャーなもの、もう2つはマイナーのもの。地域とオペラをつなぐという想いと、メジャーなものだけでなく非常に難しいものでもチャレンジすることで、他にない魅力を様々な世代に感じてもらうために公演をこれからも続けたいと思います。

また、学生のみなさんは自信を持って何かを身につけてほしいです。僕自身、語学の勉強をしていたからこそ自信を持って音楽で仕事をできました。自分の人生にも自信を持てます。今でも海外の演奏者と話すことが苦ではないです。自信を持って何かを成し遂げてほしいと思います。

菅：映像などを使用した面白い公演が「みつなかオペラ」の魅力だと感じました。まだ厳しい状況下ですが、今回の「阪急宝



塚線ミュージック駅伝 MOT!」のなかで数少ないオペラ公演が来年も続くことを願っています。本日はありがとうございました。

(2020年10月16日大阪音楽大学にてインタビュー)

〔公演プログラム〕

創作オペラ「満仲～美女丸の廻心」

近松門左衛門が人形浄瑠璃を、また、河野黙阿弥が歌舞伎を採り上げた、川西の民話『美女丸と幸寿丸』が基になった創作オペラ。題材となっている源満仲が多田院を川西に築いてから1050年の記念年を期に20年ぶりに再演。

2020年10月10日(土)16時開演、10月11日(日)14時開演

指揮：牧村邦彦

演出：井原広樹

管弦楽：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団

ピアノ：掛川歩美

合唱：みつなかオペラ合唱団

出演：(10日)片桐直樹、西尾岳史、近藤勇斗、香川梨佳、岡田彩葉
(11日)福嶋 勲、迎 肇聡、中川正崇、阪上真知子、西田真由子

●第29回みつなかオペラ「満仲～美女丸の廻心」は、令和2年度(第75回)文化庁芸術祭賞 優秀賞を受賞されました。



川西市みつなかホール

兵庫県川西市小花2丁目7番2号

アクセス：阪急電鉄・能勢電鉄「川西能勢口」駅東口から徒歩約5分
JR「川西池田」駅から東へ徒歩約12分

<https://www.kawanishi-bunka-sports.com/bunka/>





Azalea Hall

池田市民文化会館アゼリアホール

加納雅子

(一般財団法人いけだ市民文化振興財団事業マネージャー)

名原貴子

(一般財団法人いけだ市民文化振興財団事務局員)

×

山上あゆみ

(大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻3年)

池田ならではの企画づくりを

山上：今回の企画立案の経緯について教えてください。

加納：今回は日本博に応募するというので、池田ならではの「日本と西洋の融合のプログラム」を考えた時に、池田は「落語」に縁の多い地域で、前々から落語での町おこしをよくやっているの、音楽と落語が何かつながるようなイベントをできないかなというのが真っ先に浮かびました。当館でも年間で落語会がたくさん行われているのですが、今回出演して下さった桂春團治さんにはいつも大変お世話になっているので、ご相談させていただき今回の公演に至りました。

山上：そうだったんですね！池田と落語の関係についてももう少し詳しくお聞かせいただけますか？

加納：まず、古典落語に池田が舞台のものや地名が出てくる作品があるんです。『池田の猪買い』『牛ほめ』『鬼の面』という3作品なのですが、意外と古典落語に地名が出てきたりするの少ないんです。他にも、池田には全国で初めて公立の上方落語資料館「落語みゅーじあむ」がありますし、桂米朝さんがサンケイホール等で始めたのをきっかけに、それまでは芝居小屋やお寺で細々とやっていたものを全国の文化会館で落語をするようになったのですが、その最初期から、この小ホールは米朝さんに気に入っていただいていた、お亡くなりになるまでずっと落語会をやってくださっていました。あとは、



桂春團治という落語の大きなお名前があるんですが、三代目の方がまだご存命の時に、初代と二代目の碑を縁のある池田市内のお寺に建てて法要されているんですね。それを自分たちだけでやるのではなくて、地域の人も一緒になって春團治という名前を未来へ向けて皆さんに知ってもらえるようなイベントを、というご相談をいただいて、商店街や我々文化会館、NPOなどのボランティア団体を巻き込んで、「春團治まつり」というものを20年以上続けています。

山上：すごい、20年も！

加納：そうなんです。池田にお住まいの落語家さんもおられますし、そのような方たちが落語の解説ツアーをやってくださっていることもあり、何かしら落語にまつわることがあるんです。あとは我々の主催ではないですが、社会人落語の日本一決定戦も10年以上やっています。ですので、池田は落語が他の館よりも身近な存在であると思っています。

山上：すごいですね、想像以上に落語にご縁があっぴびっくりしました(笑) 知ることができてよかったです。ありがとうございます。名原さんはいかがですか？

名原：私は、もともとバロック・コンサートを担当させていただいていたという経緯もあり、今回花團治さんと関西室内楽協会さんに所属している大阪チェンバーオーケストラさんとのイベント担当になりま



した。「日本の四季」ということについて普段なんとも思わず生活していたので、日本とヨーロッパの四季について、改めて色々勉強したり比較したりして、とても刺激になりました。ですので、企画に携わることができて嬉しく思いました。

コロナ禍で感じた「人」とのつながり

山上：今年の新型コロナウイルス感染症の流行で大変だったこと、変化したことがあれば教えてください。

名原：そうですね。集客について、普段、公演のPRとして類似した公演のプログラムにチラシの挟み込みを依頼して集客につなげていた部分があったのですが、今年はそれがなかなかできなかつたり、挟み込みをするイベントそのものがなくなってしまったりという状況でした。それが一番大変でしたが、このご時世お互い様ですから、と協力してくださる団体さんもおられて、それはとても助かった出来事でした。

加納：何でもかんでもコンサートが中止になっていたの、ある意味コンサートを渴望されているお客様が結構いらっしゃったりして、普段はバロック・コンサートに来られない方でも、お声掛けをしたら「行く！」と言ってくださったり、今回は内容がヴィヴァルディだけでなく唱歌も入っていたので、普段来られないお客様も来やすかったのだと思います。

山上：たしかに、唱歌って誰しも小さい頃からどこかで聞いたことがありますもんね。

加納：そうですね。あとは自由席のコンサートですと、普段ならいい席をとりたいた方が早くから並ばれて入口が密になってしまいます。今回は入場規制として整理券を配ったり並んでもらったりということをしたのですが、これは普段ならしていないことでした。

あとパフォーマーの方は、完璧な形で届けたいという考えの方が多いと思うので、本番中のマスク着用をこちらからお願いしづらかったのですが、皆さん協力的で、お客様も検温やマスク着用にも配慮して下さり、それぞれが気を遣ってくださったから公演がスムーズに終演したと思っています。

名原：パンフレットを手渡しではなく椅子の上に置いたりもしましたし、座席を舞台と2メートル間隔を開けるということで色々図面を書いてみたり、あちこち窓を開けて換気したり。いつもと違う気の張り方でした。



加納：バロック・コンサートでは特にチェンバロなどは音が小さいので、窓を開けすぎで音が聞こえなくなったらどうしよう、という心配もしながらも、今は換気重視で。お天気が良かったので幸いでした。

山上：様々なご苦労があったんですね。私は本番だけでなくリハーサルも拝聴させていただいたのですが、本番に向けた出演者の方々の合わせはリハーサル以外にも何度かあったんですか？

加納：河野先生の関西室内楽協会と花團治さんの組み合わせは過去に何度かされているんですね。ですのでお互いの呼吸などは割とわかっていらっしゃる。それぞれがお忙しいので、あの日のために何回も練習をして、ということは難しかったです。何回かはやってらっしゃると思いますが、主には当日の午前中の打ち合

わせでしておられたと思います。リハーサルもさーっと通されていましたが、花團治さんなら大丈夫と私も信頼していました。本番が始まって思っていた以上に絶好調でしたが（笑）

山上：確かに、絶好調なトークでしたよね。私は落語が初体験だったのでちゃんと理解できるか不安だったのですが、しっかりと笑わせていただきました（笑）素晴らしい公演を鑑賞させていただきました、本当にありがとうございました。それでは、最

後に来年の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」への意気込みをお願いします。

加納：実は今のところ、池田はまだ来年に関しては白紙状態なんです。これからどうしていこうと考えていくのですが、せっかく「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」で同じ時期に他の会館さんと一緒にやっていくわけなので、池田らしい特色を出せるようなコンサートにできればと思っています。

(2020年11月21日インタビュー)

出演者インタビュー

桂花團治（ナビゲーター・落語家）

河野正孝（指揮・関西室内楽協会主宰）

赤松由夏（ヴァイオリン・大阪音楽大学特任准教授）

×

山上あゆみ（大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻3年）

音楽はコミュニケーション

山上：この公演にはどのような思いを持って臨まれましたか？

桂：最初河野先生からお話をいただいた時、面白い試みだと思いました。なかなかない企画ですね。個人的にはこういうのが僕の1つの看板になれば嬉しいなという思いで取り組ませていただきました。僕もクラシックは門外漢なのであんまり知らないのですが、この機会をいただいて、クラシックは知れば知るほど面白い、この面白さをもっと伝えたいという思いでやらせていただきました。

河野：我々の一番大きな母体「関西室内楽協会」を創設した当初の目的が、「入場料が安く、質のいい音楽会を提供する」でした。室内楽が一番お客さんが入りやすい、理解しにくい音楽だと思っています

が、いかに身近に音楽を感じてもらえるかが一番大事でね、理解するしないは別として、楽しく聴いていただけたらと。音楽はコミュニケーションなので。

赤松：現在第3波と言われている最中でも、来てくださったお客様がたくさんいる。月並みですけど、その方たちに楽しんで帰ってもらえたらという思いで演奏していました。





「唱歌」は日本人の心のふるさと

山上：今回の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」のテーマは「日本人と自然」でしたが、「日本の四季」についてはどうお考えですか？

河野：日本の四季は、「唱歌」です。僕たちが小さい頃は母親に歌ってもらったり身近にあったものが今は廃れてきて、忘れられているけれど、日本の四季は、日本人の心のふるさとです。日本の四季を表現する「唱歌」は若い人も年をとったら必ず思い出す曲ですから、そういう意味では「心の故郷」でいいんじゃないでしょうか。

何かに夢中になれることの大切さ

山上：それぞれ落語の道、音楽の道を志された理由を教えてください。

河野：勉強するのが嫌いだったんです。家が一族郎党医者だったのですが、楽器を持った瞬間に夢中になりました。勉強しなくても良かったのが音楽、一日中楽器を触っても楽しかった、それだけです。食うか食えないかということは全く考えずに大学に進んで、うまくなったら食えると思ってました。実際世の中そんな甘くなかったけど、そんなことよりも夢を追いかけていました。関西室内楽協会をつくった理由は、一生音楽できる場所を作りたいからでした。80歳まで現役

でやるのが目標です。

桂：僕は小学生の時に吃音^{きつおん}で、いじめられっ子でした。お楽しみ会で、同じく仲間外れにされていた友達と2人で漫才をすることになって、吃音だから囁んでしまって笑われると思ったので一生懸命練習しました。それが、また受けたんですよ。ずっと笑われる人生だったのが初めて人を笑わせることができ、そこからは河野先生と一緒にお金は関係なくなって、とにかく芸人になりたい一心で新喜劇に憧れ、高校生になって落語に出会って、そこからずっと落語。だから僕は吃音からのスタートです。それで、落語にのめり込んでいっているうちに、いつの間にか吃音の悩みが消えていました。世の中わからないものです。

赤松：私の父が河野先生と一緒に関西室内楽協会を作って、物心ついた頃には周りにクラシックが溢れていました。父はサクソフでジャズもしていて、母はピアノで伴奏という音大カップルの両親です。楽器は親とは関係ないところを選びましたが、ありがたいことにそういう環境があったので自然とヴァイオリンをやって、大きくなったら両親と一緒に大学に行って、というすごく珍しいパターンだと思います。いい意味



で垣根の低いクラシック・コンサートが周りにあったので、クラシックが堅苦しいということを考えてことがなくて、両親の友達は「子供に音楽家になってほしかったけど無理だった。どうやって子供を音楽家にさせたの？」とよく聞かれるのですが、強制されたことはなくて単に周りの環境が気持ちよかったです。

河野：この子のお父さんと一緒に協会を作ったときは少ない人数でしたが、ヨーロッパ留学で知り合った人たちを含め、一生懸命人を集めたというわけではなくて、いつのまにか人が増えて大きくなっていました。最初はお客さんより演奏者の方が多いときもあった。仕事をしながら、お金もないのにたくさん演奏会をやったときもあったけど、それが楽しくて仕方なかった。

赤松：金儲けのために集まって作っている仲間ではなく、本当に音楽がしたいから集まっているという状態に、私は最初からそこにいました。これが儲けるために色々あざとくやっている団体だったなら、私は音楽を続けていなかったかもしれないです。

音大生へのメッセージ

山上：最後に、音楽の道を志す音大生に、一言メッセージをお願いします。

河野：音大生の間に学ぶことは音楽家人生を築くための基礎作りと考えて4年間の間に将来自分の目指す音楽の方向を見つけることが大事です。卒業してからは、その見つけた音楽の道を外れることなく精進、まい進してください。生活のためにお金を稼ぐことももちろん必要です、しかしともすれば目先のお金に走ってしまいます。音楽家として長く続く人生においては自分が目指した音楽の道と生活のために稼ぐお金との両立、バランスを図らねばなりません。そうして音楽の道を続けていくとお金では買えない、かけがいのない音楽仲間、音楽の本当の喜びや豊かさを得られることができます。

(2020年11月15日インタビュー)

〔公演プログラム〕

落語家 桂花團治のおもしろクラシック ヴィヴァルディと日本の四季

落語家、桂花團治がナビゲーターとなり、ヴィヴァルディ《四季》と日本の四季の名曲の数々を落語調の解説で季節ごとに演奏されました。

2020年11月15日(日) 14時開演

出演：桂花團治(ナビゲーター)、河野正孝(指揮)、赤松由夏(ヴァイオリン)

オーケストラ：大阪チェンパーオーケストラ

曲目：A. ヴィヴァルディ《四季》

日本の四季 (春)《朧月夜》 (夏)《浜辺の歌》 (秋)《虫のこえ》 (冬)《雪》 ほか



池田市民文化会館アゼリアホール

大阪府池田市天神1丁目7番1号

アクセス：阪急宝塚線「石橋阪大前」駅から徒歩8分

<https://azaleanet.or.jp/>





Maple Hall

箕面市立メイプルホール

和田大資

(箕面市メイプル文化財団 芸術創造セクションマネージャー)

×

巽美寿紀

(大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻4年)

企画への道は人とのつながり

巽：今年の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」のテーマは「日本人と自然」でしたが、「身近なホールのクラシック」DISCOVER NIPPON 箏の最先端をゆく」公演を開催することにしたきっかけや理由があれば教えてください。

和田：「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」に限らず、僕は、コンサートの企画、例えば何をやる、誰を呼ぶ、などは人とのつながりで自然と道ができていくイメージを持っています。日々の人との関わりや話の中で、自然と道ができていっているので、箏を選ぶというよりは、片岡リサさんにぜひお願いしたいという気持ちから、「箏」の公演を開催することに決めました。

巽：演出などで工夫された点やこだわった点があれば教えてください。

和田：こだわった点は「照明」です。本番当日から約1ヶ月前、舞台スタッフと片岡さんと相談した際「照明」に変化をつけようという話になりました。箕面市立メイプルホールではマイクを使わずに生演奏をお客様にお届けする場合は、通常は反響板を設置するのですが、そうすると、「照明」でできることが制限されてしまいます。しかし、そんな中で、一部でも照明をこだわることで箏や尺八のみというシンプルな舞台配置でも、視覚的な変化をつけ、お客様により楽しんでいただけるのではないだろうかという理由で、照明に色を加えてみたり、花柄に見えるようにしたりと、工夫しました。

巽：出演者はどのように決められましたか？

和田：元々僕が所属する財団では、コンサート以外にも、生涯学習講座で講座を開催しているのですが、今回公演の司会を務めてくださった、大阪大学の伊東信宏先生も《身近なホールのクラシック》の講師を定期的に務めてくださっています。伊東先生から片岡さんをご紹介いただき、以前に片岡さんのコンサートを聞いた経験があったので、ぜひ出演していただきたいと考えました。

身近なホールの存在

巽：タイトルはどのようにして決められましたか？

和田：「箏の最先端」というのは、いわゆる現代音楽のことを示しています。また、《身近なホールのクラシック》というのは、箕面市立メイプルホールで定期的に開催しており、今回は、大阪交響楽団の演奏を予定しているのですが、このタイトルにこだわりを持っています。地域のお客様のためのホールとして存在したいという気持ちがあります。身近なという言葉は、クラシックにかかるのではなく、ホールという言葉にかかっています。クラシックというと、ハードルが高いと感じてしまう方や、難しそうに感じてしまう方がいて当然だと考えています。なぜなら、それは同時に古典の魅力だとも感じているからです。そんな中で、お客様にとって身近に感じる「あのホールで開催しているコンサートだから行ってみよう。」と思っただきたいですし、身近なホールには、日頃から地域の皆様と顔が見える関係を築いてきた、「身近な職員」がいます。その「身近な職員がお勧めするコンサートだから行ってみよう」とも思っただきたいです。ハードルが高く感じるクラシックに少しでも行きと思っただけの願いを込めて、《身近なホールのクラシック》というタイトルをつけています。



コロナ禍でのコンサート開催

巽：新型コロナウイルス感染症が流行し始めて、ホールとしてどのような影響がありましたか？

和田：元々ホールで開催する予定であった色々なイベントが中止になったり、延期になったりしました。また、実際にチケットを買ってご来場いただくお客様も不安を抱えているだろうと思います。なので、新型コロナウイルス感染症の影響というのは、僕たちだけでなく全員に影響が出ているのではないかと思います。

巽：新型コロナウイルス感染症が流行している中で、リハーサルはどのように進んでいましたか？

和田：片岡さんのソロリサイタルということで、練習などはお任せしていましたが、前日のリハーサルで改めて新型コロナウイルス感染症が流行し、普段の 50% 以下の入場者数という状況で、この空間を満たすに十分な片岡さんのアーティストならではの存在感や箏の響きが素晴らしいと感動しました。そして、お客様とこの感動を共有できるということがライブならではの魅力だなとリハーサルで改めて感じました。

巽：公演当日に行なった、具体的な感染拡大防止策について教えてください。

和田：大阪府と箕面市の方針に従い、決められたことをきっちり守るということで、お客様には、マスクの着用、アルコール消毒、検温の実施、ソーシャルディスタンスの確保、大阪コロナ追跡システムへの登録のご協力をお願いしました。また、舞台上でも出演者同士で距離を取っていただき、MC 中にはフェイスシールドをしていただきました。

巽：今回のコンサートで得たこと、今後も続けていきたいと思うようなことはありましたか？

和田：今回、チケットが完売しまして、お客様からの支持をいただきました。《身近な



ホールのクラシック》へのお客様の期待を感じることもできました。また、《身近なホールのクラシック》ファンの方だけでなく、片岡さんのファンの方も多く来ていただきました。このような、人と人のつながりができていくコンサートを今後も継続していきたいと思っています。

地域全体で 楽しめるコンサートに

巽：最後に、来年度の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」テーマとして「今伝えたい音楽、音楽のこれまでとこれから」が予定されていますが、来年に向けての思いをお聞かせください。

和田：来年について、実はもう企画が決まっています。僕たちが今やりたいことは、地域のお客様にサプライズを届けたいということです。決まっている企画のポイントが2つありまして、1つ目に、「え！この人が箕面に来るんや！」という驚きをお客様に感じていただけるようなスーパースターを呼びたいということ。2つ目に、来年度の「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」の企画は箕面市立メイプルホールだけでなく、あと2つの会場で

もコンサートを開催したいということを考えています。箕面市立メイプルホールでのコンサートをメインに、箕面市メイプル文化財団が管理している施設で、前日と前々日に箕面市立メイプルホールよりも箕面市内のもっと身近な場所でコンサート催するというサプライズを届けます。今伝えたいことは、ライブの楽しさ、音楽の良さ、コンサートの面白さなので、

感染状況にもよりますが、僕らの心理として、電車に乗って大きな街まで行くのは自粛するけど、歩いて行ける距離なら……という気持ちで足を運んでいただければ嬉しいです。

(2020年12月15日インタビュー)

出演者インタビュー

片岡リサ
(箏・大阪音楽大学特任准教授)

×

巽 美寿紀
(大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻4年)

コンサートの裏側

巽：片岡先生のオフィシャルサイトの記事を拝見させていただきました。記事の中に「手がもぎ取れるほど練習をした」と書かれていましたが、練習はどのように進んでいましたか？

片岡：これまでの経験から、この曲であればこれくらいの練習時間を要するであろう、という想像がつくので、今回は11月から12月にかけて忙しいことが予め分かっていたこともあり、曲によりますが、2ヶ月ちょっと前から本格的に取り掛かりました。ですが、想像以上に本番までが忙しすぎて、自分の時間を作るのに苦労しました。大学のレッスン室や自宅でも、空いている時間は午前中から夜中まで、とにかく10分でも15分でもこまめに練習するようにしました。

巽：今回のコンサートで意識したことや演奏

するにあたりこだわった点があれば教えてください。

片岡：演奏する曲が全て雰囲気異なる曲でしたので、どの箏でどの曲を弾くのか、箏を何面使うのか、直前まで考えていました。箏は曲によって全て調弦が違うので、曲が変わる毎に楽器を入れ替えます。箏によって、それぞれ音色が違うし、今回は最大3面、と決めていたので、前半3曲、後半3曲、それぞれにどの箏を使うか、こだわりました。

作曲家と箏奏者

巽：桑原ゆうさんの初演作品を扱うことに決めたいきっかけを教えてください。

片岡：今回は、同世代の作曲家の委嘱作品を入れたい、と当初から決めていました。桑原さんは三味線や声明の曲も多数書かれていて、日本の伝統楽器に明るいこと、作品も音源等を聴いて素晴らしかったことで、お



願うことにしました。

巽：桑原さんから楽譜を受け取った時のお気持ちや印象を教えてください。

片岡：まず、約1ヶ月前になって、ようやく最初の1ページ強を見せていただき、五線譜ではなく、箏の専門的な縦書きの譜面で書いていることを知りました（笑）冒頭部分だけですが、「おお！桑原さんっばい」と感じました。桑原さんは西洋楽器でもよくポルタメントやグリッサンドのような音の移動を多用されるイメージなので、その雰囲気がこの歌にも使われているため、その冒頭部分を見ながら、曲のイメージや歌い方、3本の弦をプリペアドする方法を相談しました。相談する中で、弦をクリップで挟むと、金属部分が共鳴し、鈴のような音が同時に鳴ることがわかり、2人で「これだ！！」と確信しました。完全な楽譜を受け取ったのは約3週間ほど前でしたので、とにかく早くさらわないと！早く歌の音程をとらないと！！と焦っていたのを覚えています。

巽：作曲家・箏曲家である宮城道雄さんの孫弟子にあたる片岡先生は、「宮城道雄作品を必ず扱う」ということをお話しされ



ていましたが、今回、《五十鈴川・祭りの太鼓》と《こすもす》を選んだ理由を教えてください。

片岡：今回の公演の核となるテーマは、日本の風景や自然に関する曲でしたので、宮城の箏独奏曲の中から、伊勢神宮が由縁の《五十鈴川・祭りの太鼓》にしました。宮城の箏歌曲を得意としているため、宮城の歌曲の中から1曲入れる予定で、当初、この公演が11月開催という案もあったので秋らしい《こすもす》を選曲しました。

コロナ禍でのコンサート

巽：新型コロナウイルス感染症の流行により、コンサートへのお気持ちの変化はありましたか？

片岡：12月には少しは収まっているだろうと思っていましたが、公演の1週間前に大阪府の新型コロナ警戒信号の赤信号が出され、箕面市立メイプルホールが公共ホールのため、ここにきて公演中止か!?という不安もありました。が、ホールの皆様の念入りの対策、準備のおかげで無事に開催でき、安心しました。ご来場のお客様からも、前後左右の座席を空けてお座りになれる安心感があったとお聞きしました。

巽：スケジュールの変更などコンサート開催までに影響を受けたことはありましたか？

片岡：個人的には、コロナ禍の影響で、10月

頃まで演奏の仕事がほとんどなく、演奏活動再開後すぐの公演であったため、練習を重ねても、普段通りの気持ちで演奏に臨めるのか、精神的な影響が大きかったです。

箏奏者としての道

巽：片岡先生が感じる、箏の魅力について教えてください。

片岡：箏は独奏楽器でもあり、古来より歌の伴奏や他の楽器（雅楽器や三味線・尺八など）との合奏で発展してきました。ですので、先ほど述べたこととつながりますが、現代においても洋の東西を問わず、どんな楽器とも合奏可能であるはずで、独奏曲、弾き歌い、合奏曲と幅広く多くの可能性をもつのは、箏の魅力のひとつでしょう。

巽：片岡先生の箏奏者としての目標を教えてください。また、次回ソロリサイタルの開催予定などあれば教えてください。

片岡：箏は一般的に聴く機会の少ない楽器のひとつです。もっと巷で多く聴いていただく機会が増えるよう、さまざまな西洋楽器・民族楽器とのアンサンブルを通して、

新しい作品を作っていきたいと思っています。その一端を担う奏者になれるように活動していきたいです。また、ソロリサイタルは、なかなか肉体的にも精神的にも大変なので、毎年開催というのが簡単にいかないのですが、せっかく今回、こういう攻めの内容で演奏できたので、何かの形で必ずつなげていきたいと思い、2021年10月27日に豊中市立文化芸術センターでリサイタルを開催することにしました。更なる箏の可能性に挑戦します。

巽：最後に、今後、音楽業界に携わっていきたいと考えている若者に対し、伝えたいことがあれば、メッセージをお願いします。

片岡：音楽業界といっても、いろんな職種がありジャンルが異なると状況も違いますが、ひとつのことに最初から決めてしまわず、視野を広げることは損ではありません。経験を積み、知識を増やし、そして人脈を広げ、自分なりに出来ることをやってみてください。私も、もっともっと新しいことを吸収し、演奏にげしていきたいと思っています。

(2021年1月8日メールインタビュー)

〔公演プログラム〕

《身近なホールのクラシック》

DISCOVER NIPPON 箏の最先端をゆく

箏曲と西洋音楽の融合を手掛けた先駆者でもある宮城道雄作品から現代の日本を代表する作曲家の西村朗や藤倉大作品に加え、気鋭の作曲家・桑原ゆうへの委嘱作品まで、箏曲の「今」を取り上げることで、今なお変遷を続ける箏曲の魅力を発信する。

2020年12月12日(土)14時開演

出演：片岡リサ(箏)、長谷川将山(尺八)、伊東信宏(司会)

曲目：宮城道雄《五十鈴川・祭りの太鼓》、宮城道雄(作詞：北原白秋)《こすもす》*、西村朗《彩歌》、桑原ゆう《言とはぬ箏のうた》(新作初演)、廣瀬量平《十六夜》(尺八)、藤倉大《Ryu(竜)》

*この曲には尺八が入ります。



箕面市立メイプルホール

大阪府箕面市箕面5丁目11番23号

アクセス：阪急箕面線「箕面」駅から徒歩7分

<https://minoh-bunka.com/maple/>



学生座談会

「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」に参加しているホールの担当者様に、学生が聞きたい質問に答えていただきました。それを元に学生で座談会を行なった内容をまとめています。

Q.各年代ごとの音楽との関わり方について教えて下さい。

20代まで→演奏をする
30代→仕事とする
40代→ファンとなる



箕面市立メイプルホール / 和田大資さん

Q.今の仕事につながった、若い頃にして良かった経験は?

芸術で触れることで
得られる感動体験



宝塚市立文化施設ベガ・ホール / 岡田陽一さん

吉川：最初の質問は「今の職に就くまでどんな仕事をしていましたか？」
巽：音楽と関係ないところで働いていた方もいれば、ずっと音楽に携わっている方もいてそれぞれだね。
山上：岡田さんの「一般企業の営業職だった」というのが驚きました。これが一番つながりがないのかなって。
梶本：でも岡田さんは趣味でずっと音楽を続けてたんだよね。
巽：音大生でもそういう人は多そうだね。私たちも音楽に携わりたくてって入学してる子が多いじゃん。なんだかんだ音楽が好きで音楽に戻っちゃうんだろうね。
梶本：朝倉さんの「関西フィルハーモニー管弦楽団で32年間オーボエを演奏し、その後5年間事務局長をして定年退職し、現在の職に」とってキャリアは絶対に僕たちじゃ敵わないよね。

巽：私たちの同級生もこういう人が出てくるかもしれないね。
吉川：次の質問は「各年代ごとの音楽との関わり方について教えてください」
菅：みなさん音楽にどのような形であれ、触れてこられているんだね。加納さんはすごい幅広いね。「レゲエ、琉球舞踊、チェロ……」
吉川：レゲエなんて普段の加納さんからは想像つかないな。
巽：あと和田さんの「音楽を仕事としている意識はありません」というのすごく素敵じゃない？
山上：「20代まで→演奏をする、30代→仕事とする、40代→ファンとなる」とってすごくいいですね。理想の音楽との関わり方というか。

梶本：仕事で支えてるっていう気持ちとファンとして支えるっていう気持ちだと全然モチベーションが違うだろうね。
吉川：次の質問は「今の仕事につながった若い頃にして良かった経験を教えてください」
巽：これすごい興味ある。
梶本：今一番僕たちが知りたいことだね。
菅：岡田さんの言葉がすごく好き。「芸術で触れることで得られる感動体験」というのは、演奏する側だったからこそその言葉だね。
吉川：岡本さんの「語学の習得」は音楽関係で仕事するなら海外のアーティストを扱う時に絶対必要だね。
菅：岡本さんはヨーロッパに行った経験があって、英語ができたから今があ

あるっておっしゃってた。
梶本：しかも20代後半で会社辞めて……。そう考えたらすごい踏み切ったんだろうなって。
星野：本気だったんだろうね。
山上：なかなかできないですね。
梶本：そういう人になりたいな。

Q.ホールで働く魅力を教えてください



池田市立文化会館アゼリアホール / 加納雅子さん

一生懸命取り組んだ仕事の成果が
お客様の反応に返ってくる

Q.ホールで働きはじめてから変わらずに
大切にしていることはありますか？

このホールに関わる全ての人を
大切にすること



常翔ホール / 禅定佳隆さん

吉川：次の質問は「ホールで働く魅力を教えてください」

星野：岡田さんの「お客様のハレの場をお手伝いできること」っていう言葉すごく印象的。

梶本：コンサートに行く時って身だしなみを整えて楽しみに待ってるっていう人は多いんじゃないかな？そういう意味でお客様にとってのハレの場って言うんだと思う。

星野：普段私たちハレの場って言葉使わないよね。

梶本：でも言われるとハッとすると言葉というか……。僕はおお客様の気持ちってコンサート作る時あんまり考えることないんだよね。作る方に精一杯で。

菅：加納さんの「一生懸命取り組んだ仕事の成果がお客様の反応に返ってくる」って前職のホテル・料亭旅館の従業員をされて感じてきたことを

ホールでも感じるができるってすごくいいよね。

星野：社会人って仕事が好きで仕事に全力な人と、仕事でお金を稼いで休日に自分を癒してあげる人の2パターンだと思ってたけど、みなさん仕事の方が楽しい側だね。

梶本：どれだけ辛くても頑張れるんだろうな。お客様が活力になっているんだろうね。

吉川：次の質問は「このホールで働きはじめてから変わらずに大切にしていることはありますか？」

梶本：岡本さんの「笑顔」はすごく感じるね。岡本さん、会場ですごく笑顔だったから。「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」の会議ではすごくドシッと構えてて年長者としているんことを言ってくださるけど、お客様と話してる時の岡本さん可愛かった（笑）

星野：私インタビューに行った時に禅定さんにその話聞いた。岡本さん怖そうにしてるけど本当はすごく優しいおっちゃんやからなって（笑）。

梶本：人を大事にする話は多いね。

菅：特に禅定さんの「全ての人を常に大切にすること」いい言葉。

巽：あと岡田さんの言葉もすごく好き。「お客様にとっては一生に一回の公演かもしれない」

梶本：それぐらいの思いじゃないときっともう一度来てもらうことなんて難しいかもしれないね。

山上：以前、百貨店に勤めていた和田さんは加納さんと近い考えですね。信頼関係だったり地域性だったり。前職が近い仕事だからお2人って考え方近いのかな。

菅：確かに。百貨店もホテルもおもてなしに特化した場所のイメージがあるね。

Q.ホールに勤めてから印象深い出来事を教えて下さい。

世界のアーティストと語り合えたこと



川西市みつなかホール / 岡本健一さん

Q.今を生きる若者へのメッセージをお願いします。

若い時の行動力は何よりも貴重なもの
失敗を恐れず突き進んでください



豊中市立文化芸術センター / 朝倉祥子さん

吉川：次の質問は「このホールに勤めてからの印象深い出来事を教えてください」
巽：禅定さんかっこいい。「ステージ上で調律師の方が最初に鍵盤に触った直後に、いい響きのホールですねっておっしゃったこと」だっけ。
菅：誇りになるよね。
山上：岡本さんの「世界のアーティストと語り合えたこと」ってすごく懂れます。
菅：小澤征爾さんだっけ？
梶本：うん。佐渡裕さんも。ヨーロッパと一緒に仕事するってなったら基本英語ベースで話すんだって。自分だけ通訳つけるわけにもいかないし、喋れてよかったっておっしゃってた。
吉川：朝倉さんは今のことだね。「コロナ禍でホールが閉館になったこと」
梶本：みんなはこのコロナ禍でコンサートとか行ったの？
一同：行ってない。

梶本：僕は5公演行ったんだけど、みんない顔してた。ようやく生の演奏が聴けるって。働いてる人はその何倍も嬉しかったんだろうなって思った。
星野：空白の時間があるからこそだね。
梶本：音が鳴ってないホールって……寂しくならない？あれが半年続いてたら働く身としては寂しいよね。
吉川：次の質問は「壁や課題にぶつかった時、どう乗り越えてきましたか？」
巽：上司とか師匠とかに相談する方が多いね。
山上：加納さん……和田さんもですね。
梶本：岡田さんはすごく岡田さんらしい。「余計なことは考えず目の前の課題を少しずつでもクリアしていく」
菅：メッセージ性があるよね。頑張りよって言ってくださってる気がする。
吉川：和田さんの「わからないことは間違いを認める、助けを求める、失敗を

認める」って意外とできないよね。
巽：大人になればなるほどできない気がする。でも一番大事なことも。
星野：回答にすごい人柄出てる。もともとそういう方なのかと思ってたけど意識してることだったんだね。
梶本：うん。作られていったじゃないけど、そうやって働きながら経験を積んで成長していったんだと思う。
星野：こういう考えを知った上で会議の様子を思い返すと、だからこういう佇まいとか発言とかだったんだってわかるね。
巽：うん、面白いね。

吉川：次がラストの質問。「今を生きる若者にメッセージをお願いします」
梶本：1人ずつ順番に見ていこうか。
菅：まず岡本さんから。「基礎を大事にする」
巽：ちゃんと自分の中に芯、基盤があるよね。
梶本：そういうこだわりを持ちたいね。
菅：次は岡田さん。「とにかく動く、人と社会と関わりを持つこと」
吉川：それこそ私たちは今貴重な体験をしているなって思う。ホールの方のお話を聴ける機会なんてなかなかないし。
巽：大人の方に「蓄積が今後の財産になります」って言われたら説得力があるね。
梶本：うん、頑張ろうって思える。
菅：次は禅定さん。「一瞬で生まれ一瞬で消え去る音楽ならではの素晴らしさ」美術とかと違って残らないもんね、音楽って。

さいごに

星野：本当に素敵な経験をさせていただきました。こんな話聞ける機会なかなかないもんね。

菅：同じ音楽ホールでも全然違うじゃん。それぞれのお話を聞けてとても興味深かったです。

巽：こんなに繋がりを大事にしてるっていう人たちがいるということがわかって、「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT！」っていうつながりを作れてよかったと思いました。

吉川：来年度も頑張るね。

山上：はい。失敗を恐れずこれからも頑張っていきます。



左より 菅彩乃、星野頼子、吉川さくら、梶本大雅、巽美寿紀（以上4年）、山上あゆみ（3年）／撮影：杉本隆成（3年）

梶本：うん。どれだけテクノロジーが発展しても生を大事にして場所を作っていきたい。

菅：次は和田さん。「かかりつけの歯医者さんを見つけて、歯の定期検診に通ってください」

巽：面白いねこれ（笑）

菅：でも歯って大事だよ？

巽：体調管理も大事なことだしね。この仕事って一瞬のためにかけていくじゃん。そこで崩れたら終わりだし。

山上：みなさん歯医者に行きましょう！

菅：次は朝倉さん。「失敗を恐れず突き進んでください」

梶本：……やっぱり行動だね。

星野：みなさんとにかく動けってことを言ってくださってるね。

梶本：まだ失敗しても謝ればなんとかなるもんね。ちゃんと関係性を作って。

菅：じゃあラスト、加納さん。「好奇心、

向上心を持ち続けてください」

梶本：コロナ禍で今年全然そういう機会なかったけど、社会人になっても手伝えるところに手伝いに行きたいよね。

菅：「支えになる友人のつながり」って大事だね。大学卒業しても仲良くできたらいいね。

吉川：うん。またみんなで集まろうね。

巽：でも全員が音楽っていう同じジャンルに関わって、こうやって仕事して、まちづくりとか発展のために頑張ろうってやってる中でさ、「共に貢献していきましょう」という言葉すごく重く感じた。

梶本：年齢は関係ないんだよね。

Afterword

おわりに

『KAKEHASHI』を最後までお読みいただき、ありがとうございました。「阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!」は本当に多くの方の想いが詰まっていることが、『KAKEHASHI』を制作していく中で感じました。音楽が好きだというひとりひとりの気持ちが、大きな力となりつながっていることを改めて実感しました。音楽は心を満たす上で、日常にきっと必要なものだと思えます。是非、ホールを訪れ、たくさんの「生」の音に触れてくださいませ。

今回この『KAKEHASHI』を制作するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。最後になりましたが、「MOT!」に参加してくださっている各ホールの担当者の方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。少しでも多くの方に、各ホールの企画者の想いが届くことを祈っています。

大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻

【映像】

阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!
2019>2020



企画・撮影・編集：杉本隆成 (3年)

URL : <https://www.youtube.com/channel/UC6LwRM90kio9pu1V4HkNmvg>



【マガジン】

阪急宝塚線ミュージック駅伝 MOT!
KAKEHASHI

発行：大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻 (epoch/c)
〒561-0833
大阪府豊中市庄内幸町1丁目1番地8
大阪音楽大学H号館324室内
mcom@daion.ac.jp
<https://mcom.jpn.org/epoch/>

企画・編集：大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻
梶本大雅、菅彩乃、巽美寿紀、星野頼子、吉川さくら (4年)
杉本隆成、山上あゆみ (3年)

デザイン：吉川さくら (4年)、山上あゆみ (3年)

写真：杉本隆成 (3年)

協力：坂井威文 (大阪音楽大学大学院 音楽学研究室)

発行日：2021年3月25日

ミュージックコミュニケーション演習 (教員：西村理、助手：野添貴恵)

